



昭和43年(1968年)

12月号(No. 282)

 社団法人 日本山岳会  
(J. A. C.)

## 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 随筆               |    |
| 島山善作の思い出……山下一夫   | 1  |
| 常さん小伝……初見一雄      | 2  |
| 研究               |    |
| 制動確保……石岡繁雄       | 2  |
| 会員通信             |    |
| UIAAに出席して……吉沢一郎  | 4  |
| パロ・ゾンから……小方全弘    | 5  |
| ネバルから……須田紀子      | 5  |
| 中部アンデスへ……川上 隆    | 5  |
| 図書紹介             |    |
| 遠い山近い山……今井雄二     | 6  |
| 関西学生山岳連盟報告……山崎安治 | 6  |
| そこに山があるから……山崎安治  | 6  |
| 会務報告             |    |
| 十月常務理事会……        | 10 |
| 十一月理事評議員会……      | 10 |
| 会員異動……           | 10 |
| 新入会員……           | 11 |
| 新入会員の……          | 11 |
| その他              |    |
| 富山山荘開館式……        | 3  |
| 奥尻島十首……          | 4  |
| 第十一回もみじ会……       | 5  |
| 第一回山岳図書交換即売会……   | 7  |
| 出品目録……           | 7  |
| 図書室だより           |    |
| 新刊図書受入報告……       | 8  |
| 定期刊行物受入報告……      | 8  |

## 島山善作の思い出

山下一夫

上高地の常さんの写真がないかと頼まれて、古い写真箱を洗いざらい探していたら、常さんの写真と一緒に、島山善作の写真が出て来た。

いま見ると、懐かしい顔である。彼は、大正の末期から昭和の初期にかけて、有明の案内人組合では、最も信頼のおける案内人の一人であった。

僕が初めて善作と一緒に山を歩いたのは、大正十三年の七月である。僕等の一行は、今は亡き早大OBの矢島幸助氏と、他に一名の合せて三名で、善作の他に荷担ぎを一名連れていった。

コースは燕から檜、鳥帽子の予定で、バスは勿論なかったから、初日は有明から中房まで歩いて温泉に泊った。今は大旅館に発展した中房温泉も、当時は、今もまだ残っている一番奥の小さな二階建て、ただ一棟あっただけで、主人も一代前であった。

あと一日で鳥帽子と云う最後の泊りは赤岳で、ここで丸一日風、雨に降りこめられた。矢島氏は太いハイマツの



写真は島山善作

幹を二本伐って来て、器用にソノメルシーを作り上げ、風雨の相間を縫っては、残雪の上で夏スキーを楽しんでいた。後年、塩見や赤石の冬期初登山をやった男だから、山への情熱も人一倍だったであろう。

僕等はそんな気のきいた真似は出来ないから、テントの中で善作のモノモソした熊の語でも聞いている以外に方法はない。ところが翌朝は素晴らしい快晴で、残雪を一杯につけた薬師岳が、黒部の谷を這い上る霧の罫れ間に、忽然と姿を現わした。

こんな姿を見せつけられては、黙って通り過ぎるわけにはいかない。誰が口火を切ったと言うわけでもなく、忽ち薬師へ行くことと云うことに話が決った。米は後一日分しか残っていないが、室まで行けば飯には足りる。その間は甘党の僕が持ってきた乾餾で汁粉を作った我慢する。それに善作が、俺が岩魚を釣るから大丈夫だと、太鼓判を押してくれた。

雲ノ平を横断して東沢を黒部へ下りる。善作はこのあたりの地理を、実によく知っていた。前の日の風雨にもかかわらず、幸い黒部の渡渉はせいぜい太腿までで、後はただ薬師沢をのんびり遡るだけだ。ところが今朝から汁粉ばかり飲んでいたら、僕等はすっかり胃がおかしくなつて、折角喰ったものを、とうとうみんな吐き出してしまった。これは、室堂まで腹を持たせるのは容易なことではない、と気にしていたら、いつの間にか善作がどどん岩魚を釣りはじめた。竿はネマガリ竹の長いのを一本切った。それに持参の針と糸を付けた。ひょいひょいと岩の上を渡って、歩きながら釣ってゆくから、歩行はわれわれの早さで変りはない。

見ると、いるいる。薬師沢の岩魚の群れは大変なものだ。僕も思わず小さい淀みでビクッとする。僕も思わず小さい淀みでビクッとする。僕も思わず小さい淀みでビクッとする。

その日のテントは薬師沢の沢辺へ張ったが、夕食は一杯の粥を除いて、あとは総て岩魚の塩焼である。腹が減っていることは確かだが、飯なしの岩魚だけでは、そう無暗に喰えるものではない。しかし荷担ぎの夫人は、一人で大きな奴を十数本も平けた。翌日は薬師を越えて越中沢乗越だが、こう云うのを神の恵みでも云うのであらう。スゴ乗越の小倉掛の後

に、米が殆んど半俵近く米俵へ入ったまま捨ててあった。勿論米は見事な青かびで炊いたままでは手に負えない。その時、荷担ぎが、落石にやられたらしいと云う雷鳥を下げて来た。落石が投石か真疑のほどは不明だが、当時はまだ天然記念物ではなかったから、彼等にとっては、ただの野鳥に過ぎなかったであろう。これも或いは、神の恵みの一つだったかも知れない。肉は味噌を付けて焼いた。雷鳥を喰ったのは、後にも先にもこれだけである。米はカレー仕立のおじやを作った。無理に咽喉へ流し込んだが、それでも胃袋は満足だったと見えて、その夜の眠りは至って安らかであった。

五色は小屋はあったが無人で、そのうえ登山者の影もない。待望の飯にありついたのは、矢張り室堂である。薬師のカーリに魅せられたばかりに、とうとう空腹を抱えて室堂までやって来たが、腹がくらくらんと現金なものだ。翌日は飯沢から平蔵を登って飯岳に遊んだが、善作と荷担ぎは、室堂から針ノ木越えて帰って貰った。僕等は勿論藤橋まで歩いて、富山へ出たのである。

その後善作とは穂高と常念を歩いたのだが、途中で出会ったことは二度ほどあった。長い空白の期間が経って、戦後久しぶりに中房温泉を訪ねたら、主人の百瀬孝君から、善作が中気で寝ている、と云う話を聞いた。一度見舞いに行つてやりた、などと云っている間に、直ぐに二、三年が過ぎて、その次に中房を訪ねたら、もう去年亡くなったと云う話であった。

古い写真の中から善作の写真を見付けた機会に、古い昔話でも綴れば、いささかも善作の供養ができるような気がする。

× × ×

## 常さん小伝：Ⅱ

## 初見 一雄

常さん不在の上高地は考えられない何か欠けている。空洞がみえる。彼を上高地の主人公と想っているわけではないが、上高地へ行く目的には本人に会える楽しみが含まれていないとはいえない。

これは小生独りだけの考えではないと思う。当時の仲間達は一様に同じ様な楽しみを抱いていたと想像できる。そして彼を喜ばせようと、ウイスキーの本か二本を携えていったものである。

「こんなわー」などと優雅な声であるが間の抜けた挨拶をする人間は、まづいなかったであろう。

「常さん、いたかい」といきなり、ぶつかりほうに怒鳴るものいるが、これは未だ新米の城を脱している、大体が山岳部二年生位のところだ。

「常公!! いるか!!」

この滅法威勢もあり威厳もそなわったのは今年六十五才以上の大先輩である。

「常衆!! 一杯ヤルカ!!」

ときいきなり一升瓶を突き出して、早くも咽喉を鳴らして、戸を開けるやいなや、とびこんでくるのは、酒飲み連中である。

「よくきてくれた」

この返事は普通の場合である。

「よくまあー」

このあたりまではやや良好だが、点数からいうと可の部であろう。

「……………」

何もいわないのではない。口の中になんとかをつぶやいているのだが、聞こえてこないのである。気嫌を悪くしているわけだ。

大雪をおかして峠(徳本)をこえてきたときとか、何事か無理を押し強行してきた場合だ、それ等を早く見抜いているのである。

峠のこととはあとで書くが、こちらが人夫衆か案内でも連れてくる場合だと、この人夫を、呼びつけて、小言を喰わせるのである。

「なぜ無理をする!!」

この一言は人夫にとっては千金の重さでかかってきたことだろう。

「お客の生命を何より大切に思え」これはいつも常さんの頭を去らなかつた、彼の信条であつたろう。

「一杯ヤルカ!!」

の方は、瓶を持って待ちかまえてるところへ、常さんの方が首をもってくるのだから、立ちながらのグイ飲みである。息もつがせずラッパ飲みをやつて貰うわけだが、さすがに受ける本人も美事なものである。そしてそれらが対等のプレーができることになるのである。

これをやるのは亡き人になった四高の「マムシ」の一派か、松高の「ターディー殿下」なのである。

東医の篠井さんも一時は豪酒をたしなむ方で、後年の大先生の片鱗はさらさらなかつた時代だったので、東京医大の教授時代は全然、同名異人だとばかり思っていたのである。

学習院の諸豪の方は勿論「常公!!」の方で、僕は岡部氏は知らなかつたが、波多野氏は、素晴らしい酒飲みであつた。

常さんにいわせると

「両方ともかわいいこと——可哀想なこと——をした」

となるわけである。

この波多野氏には、青木の製板小舎で会つたことがある。Mという候爵一行を引きつづけていたが、あまりスキー

の出来がなっていないので、大クサリであつたようだ。

東京に急用があるといひだして帰りにしまいかけたが、

「持って帰つても仕方ない」というより早く、瓶ごと飲みだしたのである。半分以上は残つていたと思ひ、いづれ彼のことだから五ツ星あたりにはちがいない、三口か四口で干しあげてしまつと、横に掌で口をぬぐつて、スキーをつけて小屋をでていった。

小屋番の作松爺さんは心配して直ぐ後を追つていったが、雪で見えなくなつたといひて帰つてきた、夕暮れ時である。

五色温泉までは赤い円板に番号が打つてあるから、一番までたどれば温泉の上手に出られる。

当時の波多野氏はアルバータから帰つたばかりの時で、その話を少しきかせてもらへた。

最後の最も難かしい登りで、撮影機——昔のすごく重たい奴——が邪魔になつて仕様がなく、幾度、投棄せようと思つたかもしれないやつたそうである。

その重たいものを担ぎあげたことも驚いた話だが、ラッパ飲みの方も、手の平で暖めて飲む紳士的でないのは大いに意をえた次第だが、世の中には凄腕の者がいるものと仰天してしまつた覚えがある。

氏と常さんと酒合戦の比較ができないのは残念であるが、あの飲みっぷりでは勝負はついていてと考えるべきであらう。横綱と、前頭筆頭ぐらいの差はついていてと思ふ。

話をもどして、常さんは上高地の名物というよりか、その風景の一点晴になりきつていた。

自然のなかの思ふ存分の自由さ生きて、不羈な足どりで、大地を踏みしめていた。

ある人は評して、自然人だという。その自然人としてもどつてきたのは翌年の夏であるから、かれこれ一年近く姿を消していたのである。

噂も、ほとりもさめたと思つたか、また一切の妖気は去つたと考えたのか、どちらでもかまわれない。

巻土重来というほど、しかつめらしく巻土重来してもよいが、とも角、上高地へ帰つてきたのである。

暖かく迎へ入れたのは皆の一致したことだし、小屋は丸西の裏手のものが借用できたから、この心配もなくなつた。

この小屋の件をいかに断定的にいえるのは、今年(四十二年)四月末、丸西未亡人(白樺荘の隠居になる人)に松本で会う機会があり、老眼鏡をシボシボさせながらハッキリ言明してくれた。

冷かしくないわけではなかつたが、頬を赤くしてても、大して佯びる姿勢もみせなかつたから、痛手も悩みも山のかなたに飾り落してきたとみるべきであらう。

われわれが思うような文化的な痛手ではなく、少しチョッキイを出しすぎたぐらいの気持かもしれないから、冷かし甲斐があるとは思えない。

とつてつづけたことをいうようだがせいぜい、アニトラの踊りに魂を奪われたパールギニントにもいたるまい。

ここで常さんと山登りの関係を書かなければならないが、僕は真にその任ではないのを深く恥ずるのである。

それというの本人が一時、人夫として、または案内人として働いていたと思はれる時期には、まだ幼年期で山登りなんぞは夢にしたことがなかつたからなのである。

それに、昭和初期になってからも彼と一諸に山に登つたことはないし、散歩もしたこともない。一度は捜索の手伝いをしてもつて半日ぐらいたるを歩いたことがあるぐらいいだからである。

山に関することは外に適当な人がいるから、そちらに書いて貰ふ必要がある。(未完)

## 制・動・確・保 ④

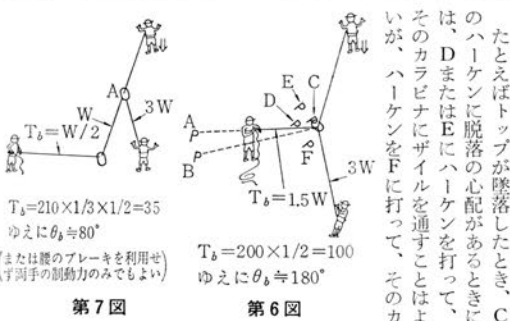
石岡繁雄

いづれにしても制動確保のための確保者の確保は従来のセルフブレーの観念ではない。従つて必要があれば、従来の観念によるセルフブレーを重ねてせねばならない。

想定例 第6図ないし第8図の想定例では、いづれも  $W \parallel OK$ 、 $グリップ \cdot \eta \cdot \eta$ 、 $Y \parallel OK$  とする。

想定例 ① 第6図

たとへばトップが墜落したとき、Cのハーケンに脱落の心配があるときには、DまたはEにハーケンを打つて、そのカラビナにザイルを通すことはよいが、ハーケンをFに打つて、その力



ラビナにザイルを通すことは原則としてよくない。もしそうすればCのハーケンがぬけたとき、ぬけなかった場合とで中間減衰率にかなりの相違が出来る、正しい姿勢がとれなくなるからである。

#### 想定例② 第7図

第7図の場合の $\theta_0$ は約八〇度であるが、もしも確保者がそれを誤って第6図の想定例のように、 $\theta_0$ を一八〇度としていたならば、 $T_1$ は七二〇キログラムとなり、おそらく麻ザイル一二ミリならば切断する。またはAのハーケンがぬける。Aのハーケンがぬければ第6図と同じ状態となり、確保者の手もとのザイルにそれだけの余裕が残っていれば、制動確保は成功する。

#### 想定例③ 第8図

ザイルが足もとの岩角を滑るので、確保者はハンマーで岩角を丸めておかねばならない。

#### 想定例④ 第9図

ザイルが実際のようになっている場合の想定では $\theta_0$ が一に近いため、制動確保はかなり困難と思われる。この場合の実験をするにすれば、落下距離の小さいところから始める必要がある。またバランス用ロープとメインザイルがずれるようカビビナで連結する必要があると思われる。(もちろんメインザイルは点線のようにならないければならない。)

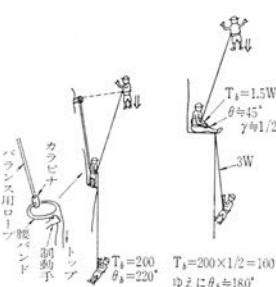
#### 定光寺での実験

日本山岳会東海支部では、昭和四十三年二月十一日、中央線沿線定光寺の岩場で、上記が妥当かどうかのテストをした。

使用ザイルは麻ザイル十二ミリ、鍾は、タイヤ三個を結んだもので五十キログラム、岩場の高さ十メートル、距離の測定はザイルに度盛を印して行った。

#### 実験①

第8図の実験ただし岩場の形状から鍾を落下させた位置は確保者の高さまでであった。坐り確保、腰がらみ、制



第9図

第8図

動手は右手。バランス用ロープを確保者の腰に結び、背後の支点にたるみなく結ぶ。

(1) 確保者は $\theta_0$ を一八〇度とし、制動手のこぶしを腰にあてる。メインザイルを岩壁に垂らし、鍾ははずし、岩壁の下で三人が静かにぶら下る。そのまま $\theta_0$ を小さくしてゆく。約一二〇度でささえることが出来なくなり、ザイルはすべり出した、これを二回くり返す。

(2) 補助員が鍾を補助ザイルで岩壁の上まで吊り上げ、ついでメインザイルにより確保者が吊り下げる。 $\theta_0$ は一八〇度、確保者は最初ザイルをしっかりと握り、指をいっばいに拡げまた直ちに握る。鍾はいったん急激に落下するが、直ちに停止する。十メートルの岩壁で鍾は三回目以下につく。制動手を腰からはなしてテストする。また、 $\theta_0$ をかえてテストする。案内手は、ただザイルにそえていくだけ。

(3) 補助員が鍾を岩壁の上までもちあげ、メインザイルのたるみを五メートルとして落下させる。確保者は最初にザイルをゆるく握り、衝撃と同時に強く握る。送り出しザイルの長さは一メートルで停止した。次に制動手を腰から離し $\theta_0$ を一四〇度くらいにし、

かつ初めからザイルをしっかりと握って実験したとき送り出しザイルの長さは一約四メートルとなる。確保者交代しにくいかえす。

(4) 水平トラバースの実験のため、鍾を岩壁の高さと水平にして落下させる。確保者への衝撃少しなし。

#### 実験②

第6図の実験、確保者は十メートルの岩壁のほぼ中央にある狭いテラスに乗る。確保者とハーケンCの距離二メートル、確保者の後方約二メートルにあるバランス用支点Bと、確保者をバランス用ロープでたるみなく連結する。また万一のため、確保者を壁の上部から確保する。立ち確保、腰がらみ、制動手は左。

(1) 実験①の(1)と同じく三人がぶら下がる。ハーケン異状なし。確保者はかなり苦しい。(腹まきがあればよい。)

(2) 鍾をハーケンA(従って落下距離は五メートル)、落下させる。送り出しザイルの長さは一メートルで停止。腰にあてた制動手のこぶしを少し屈曲させた場合、六メートル落下して一は二メートルであった。

確保者は、墜落のショックにより微動だもせず(実際には、確保者の身体は、ごくわずかに移動したはずである。その長さは、ハーケンBと確保者との距離が二メートル、バランス用ロープは十二ミリのナイロンであったため四・六センチメートルとなる。そのわけは、ナイロンザイルは、抗張力一八〇〇キログラムのときの伸びが五五パーセントであるが、この場合ザイルの張力は一・五Wつまり七五キログラムでかつザイルは二メートルなので移動した距離は

$$1800 \times 0.55 \times 2 = 0.016$$

四・六センチとなる。麻のロープならば、抗張力二〇〇キログラムで伸び十三パーセントであるので、約二セ

ンチとなる。)

終始冷静に確保を行なうことが出来る。バランス用ロープの効果は予期通りであった。また、グリップ、ブレイキ、T、ビレーンゲル等の関係がほとんど理論通りであったと確信した。以上要するに、十一回の落下テスト

中、一回の失敗もなく、わずかに半日の実験ではあったが、関係者は制動確保という登山技術は、将来確実かつ安全な技術になることを確信した。ただ墜落者の保護と、墜落して停止した後の処置を考えねばならないと思われた。なお、氷雪の急斜面での、上記方式にもとづく制動確保の実験が望まれる。(完)

#### 富山山荘の開館式

富山支部が昭和二十三年三月二十三日に呱呱の声を挙げたから今年で満二十年を過ぎた。これを記念する事業として、昨年度支部総会で決議した支部クラブハウス建設もようやく実現の運びとなり、二十周年記念式を兼ねる

場 所 富山市安養坊字倉ヶ谷(呉羽山中腹)

日本山岳会 富山山荘



開館式を次のような日程で行った。日時、昭和四十三年十月十日、午前十時。場所、富山市安養坊字倉ヶ谷、富山山荘(支部クラブハウス、富山市郊外呉羽山中腹で、ハウスの名称を日本山岳会富山山荘と決定した。)

#### △式次第

△開会のことば▽物故会員に対する黙悼▽支部長挨拶▽工事担当者(会員)への感謝状贈呈▽祝辞 富山県知事、富山市長、日本山岳会、富山県山岳連盟会長▽開会のことば 当日は期待も空しく、昨夜の雨で少々がっかりしたが、新装なった山荘は準備も完了してスイス風の屋根が緑の山腹に際立って見えた。東京から夜行列車でかけつけられた石原評議員が早朝に到着されたのを初めとして、遠く九州から三谷熊本支部長、続いて二田会長、深田副会長、沼倉評議員、更に大阪から松村初代富山支部長、隣県からは小林石川支部長も見えられ、地元の方々も到着されると、荘内

(九ページへ)



# 會員通信

## UIAAに出席して

吉沢一郎

断片的には山岳会のいろいろな人、時々の様子をお知らせしてあるが、きのう七年ぶりにニューヨークへきて、その時と同じ山岳部の後輩森脇君の家に落着いたので、一応今までの分を概略御報告させていただくことにする。九月十九日の夜、皆さんに見送られて羽田をたてから、そろそろ一カ月にたつが、自分ではもう一年も外国を歩いているような気がしてならない。というのは、毎日がほとんど緊張の連続だからで、自分でもよく続くものだと思っている。これからまだ日本へ帰り、日本語が通じ、和食が喰べられる

ようになるまで一カ月もあるのかと思うと、本当のところ多少うんざりという気持ちである。しかしそんなものはないことはいええ義理でもないことは充分承知之助である。

とにかく、山のことで世界中を股にかけて歩いてきたなんていうのは世界でも自分一人じゃないかと思っいるし、その意味では自分ほど幸福な人間はないと考えてみる。前世にどんないいことをしてきたかは知らないが、私がこんな身に余る旅の出来たことは、皆友達ののお蔭だと思っている。多くの立派な先輩や、仲間や、後輩をもったということが、私をこうさせたのであって、友達こそ私の宝であり貴い財産だと思っている。

私が今度ヨーロッパで感じたことの最大ものは（アメリカでも勿論そうだが）登山家というものは、何処の国の人でも同じで、共通点を持ち、どれもが底抜けに人がいいということであ

## 奥尻島十首

小林智明

### 釣懸川廻行

海へだつ北の小島の山中の木の間をぬけるやまがらの声  
潤葉樹のみどりおぶかき奥尻の沢の二股に汗ふきにけり  
くまざさのいぶせき谷の足もとに  
くまざさ群れ生う奥尻の山  
開墾の村はまずしもきくいの  
黄の花咲けりくもきくいの  
ふと見はレブラ病めるか奥尻  
の標高たかき開墾の村  
幌内温泉  
海ちかき出湯にひたりさいはて  
の岩にとろく潮の音をきく  
奥尻の海辺の岩のあひふかくわ  
れを見つむるあはれ蟹の眼

浪音はくらき海よりこの窓にと  
どろきよせてしろくかへすも  
ひそやかにくらき浜辺をカンテラ  
のあかりゆくみゆ夜釣りするらし  
さよふけて夢やぶられし枕まで  
潮のひびきのよする島かも

奥尻島の沢歩きについては、会報二二三号に森谷虎彦氏が紹介されておられる。その紀文と、最近の江差より奥尻に通うフェリーは二時間で行くと言き及び、八月中旬にわが仕込みの釣道具も忘れずに奥尻島に渡った。

しかしヤマメ釣りは素人の悲しさでまんなと期待ははずれたが、沢はなんとか登り、島を横断して西海岸の幌内に出た。幌内は磯にへばりついたような家が数戸（冬は住まぬとのこと）と洋々荘という小さな旅舎が一軒、幌内川に湧く温泉を引いて今夏より営業を始めたばかりであった。（四三・九）

る。私の会った人々は、日本の一部の人間達とは違つて権力や顔なごうに拘泥せず、屁理屈もいわず、ただ山といふものを中心にして朗らかに結びあつてゐる人々ばかりであった。山男とか登山家とか自分を思ひたいならそうしなければいけないのであつて、世界中を歩いてみると、日本人のいふゆる山男の中には島国根性をむき出しにした教養も礼儀もない人間が多いといふことが痛切に感じられるのである。技術がいくらかうまくても、人間的に低度の低い、品のない山男なんていうのは世界には通用しないのである。

とまあ偉そうなことをいってみたが外国の有名な登山家は勿論すべてとはいえないまでも、少くとも私の会つた範囲では皆一応の人格者であり、品位の高い人ばかりであつた。生産倍増、月給倍増をいくらか実現してみても、物価が倍増して、品物が倍に下つたのでは何もうらない。山の世界でもそういうことがいえると思う。考えなければならぬ問題である。

× × × × ×

今度は皆さんのお力添えによつて、ロンドンで開かれた国際山岳連盟（ドイツでもフランスでも大体ワイア、英語ではユーアイエー）の一九六八年度年次総会に出させていだいたわけだが、私の結論としては、これは結局世界の登山家の親睦の場と見た。勿論研究成果の発表とか、今後の共通問題などについても話されてはいたがそれよりもお互いの友好を深める機関といつたほうがよいに思ふのである。そして実際問題としても、私にはその感じが深かつた。そんなものなら下らないといふ人も出てくるかも知れないが私は逆にそういつた会だからこそ一層出席すべきだと主張したのである。彼らには極東の隅の島国で何をしたいやうと知つたことではないかも

知れないが、われわれとしては彼らと交わり、日本の登山界の現状も知つてもらひ、お互いの意見を交換して何かの足しにするといふことは決して無意義なことではない。

北ウエールズの登山学校を見せてもらったが、場所もいいがその組織と運営の方法には教えられるところが多かつた。一週間に十ポンド（約九千円）払えば宿賃から食事、教授料も用具の使用料もはいつているのである。人種の差別もしていないので、黒人の女性もいた。五、六人に一人当りの赤いセーターを着て、胸にインストラクターと記してある指導者が懇切丁寧に教える。岩登りばかりではない。救助の高級技術も教えるし、湖ではカヌーもやつた。ブラシ・ブレニンの学校では地図の作り方から岩石や植物に関することまで指導している。うらやましい設備であつた。こういうような点も大いに学ばなければいけないと思う。

日本山岳会の設備は日本では一応相当なものだと思ふが、ドイツやオーストリアの山岳会のそれに比べればもの数ではない。もっとも後者の場合には目的と組織がまるで違ふので比べる方が間違つてゐるが、とにかくいいことは真似るべきであらう。日本山岳会は英国山岳会や米国山岳会と似ているが、どちらかといへば中途半端な組織である。これも考えていい。

旅先で合間をみて落着かずには思ひ出してゐることをそのまま書いておいて順序が目茶苦茶になると思ふのが許し願ひたい。とにかくあれだけのことを日本でもやうと思つてもとても出来そうもない。十月四日の夕食から九日の朝食までスノードニアへの旅行を含めて全部向こう持ちなのだからその費用たるや大変なものである。幸い来年はチエコスロバキアのブラーハに決つてゐるからいいやうなもの、いつ

かは日本でやらなければならぬ時がくる。今のうちから基金の用意をしておいた方がいいのではないかい。いずれUIAAの会員としては、日本山岳協会の方へ肩あわりする時機が来よう。外国の登山家をいつまで経つても日本へ招くことが出来ないようでは、いくら連行登山隊の数ばかり自慢していても、それは島国的な空いばりにしかすぎない。皆で大いに研究しようではないか。

きのう私はニューヨークのラ・ガーディア空港からイースタンのエア・シャトルに乗つてボストンへきた。下りたらだれもきていないのでちよつと心配したが、十分ほど待合室にいたらアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集者のカーターが汗をふきふき済まない、済まない、ヘビー・トラフィックで遅れてしまつた、しきりにあやまりながら、私の荷物を気軽に担いで自分の車の方へ案内していつた。そこには奥さんのアンも待つていた。二人ともえらく喜んでいつた。何年もの間手紙のやりとりをしていつたが、やつときやう会えてこんな嬉しいことはない又何度もいつている。

さあこれからニュー・ハンプシャーのホワイトマウンテンにある自分たちの別荘へ行こうといふ。落着くもへつたくれもない。いきなりである。百二十キロの速度で四時間突走つた。最もその間に食料を仕入れたリコーヒが飲みたいといつたのでレストランに寄つたりしたので多少の相違はあるが、とにかく突走つた。

だんだん北の方へ行くに従つて広漠たる北海道の風景にとでも似てきた。ホワイト・マウンテンが見えてきたころ、あの辺の山はもうカナダだと教えてくれた。思へば遠く遙かに別荘に着いたのである。正六時にその別荘に着いた。ボストン空港からちょうど四時

間かった。

二階建のしょうやかなコティジ、肥った女中さんまでいる。二番目の息子や娘さん、そして息子の友人、皆元氣な朗らかない人ばかりで、ミスター・ヨシザワ、ミスター・ヨシザワで大もてである。いやこんなことを書いてあるときがないので止めるが、あすはサンドウィッチを持って山へ案内するが、サンドウィッチの中味はあなには何にしますかと奥さんがいう。そんなことで食事が済んでから十時ごろ私は二階の立派な部屋にねかされた。こんな早く横になったのは初めてなので、私はほっとした。あすはホワイトマウンテンの最高峰ワシントン山へ遊びに行くのである。

(六八・十・十八記)

## パロ・ゾンから

### 小方全弘

いま私は雨に煙るパロ・ゾンにおります。予定通り十月一日カルカッタを飛び立ちました。フレンドシップは高度四千フィートで北へ、正確にいうなら二十度東寄りに約一時間二十分でパドグラ飛行場へ着きます。ここでほとんどの乗客はダーズリンへ行くわけですが。

私は有名なダーズリン紅茶の煙をぬうように約四時間のドライブで国境の町ブントオリンに到着しました。ここでブントオリンのホテルに一泊し——南京虫に悩まされました——再びジープに乗り換え約八時間後パロに到着したわけです。

十月三日首府ティンブーへ出かけタシ・チョ・ゾンでダンスを見物しました。ここで西岡京治氏(会員、農業技術指導のため一九六四年以来コロンボラン・エキスパートとしてブータンにいます)に会うことで出来しました。

彼がブータンへ出発するのを羽田で見送ってから実に千四百七十三日ぶりの対面でした。その夜はほとんど語り明かしたことはいうまでもありません。ブータンではまだモンスーンが終わっておりません。例年より遅れているようです。パロ・チュウは濁り、まだバロまでには蝶を約百匹(もともとはほとんどブントオリンですが)二十種近く採集しました。ほとんどがシロチョウ科で私の好きなシジミ蝶はみかけませんでした。もともとは蝶は三・五月に最も多いとブントオリンの人たちはいっていました。

この国の人たちは、チョモラリーは登られていないと信じているようです。つい最近、アルパイン・ジャーナルだったか、ヒマラヤン・ジャーナルだったか、ヒマラヤン・ジャーナルの記事を読んだ記憶がありますが、もしそれが本当だとすると、ブータン領内の山はすべて未踏峰ということになります。

西岡君は仕事がいそがしいので昨十月四日は終日雪男の話をして西岡君の世話をしている青年に聞きました。なかなか面白いものです。これはまた何かの機会に書くこともありそうですが、ネパールの雪男とは若干違い非常に真実に富んでいます。

とにかくブータンは雪男がいてもおかしくないような気のある非常に魅力にあふれた国だということが出来ました。あと数日でモンスーンも終わると思います。終わる次第旅に出ます。私の高度計の針は二千八百八十メートルを指しています。(十月五日、ブータンのパロにて、山崎寛)

## ネパールから

### 須田紀子

アフガニスタン、バキスタンと廻り再びインドにはいつてから、隊員のドクター・ミナを訪ねたり、コキラメタを訪ねて再会を楽しみました。隊長のナンデニに会うつもりでしたら、スイスに登山に行っているということで残念ですが会えませんでした。六名の隊員のうち四名と親しく話ることの出来たのは幸わせた。

早く帰らなければならぬのを知りながら雨期の終わったネパールに十月三日デリーから陸路はいりました。念願のエベレストの見えぬ村までと思つていましたが、十一月二日の船での帰国をM・Mに申し込んで来たので時間が足らず、ボカラに行つて、マチャブチャリを眺めて蝶を追いかけて過しました。

カトマンズではネパール政府の依頼で撮影にきている高橋照さんにお会いしました。その他女性四人の隊でナムチュに二カ月はいつて調査するブルムラ・グループの人たちにも会いました。十一月には小方さんともネパール入りと聞いています。そのほか個人で来ている大学山岳部の卒業生など多数ですが皆帰りつつあります。

十月十八日の飛行機でニューデリーに戻るつもりが満員でとれず、二十一日になりました。ここで荷物をまとめ二十五日ごろボンベイに向かい、十一月一日M・Mのカンボジア号で帰国します。神戸に寄り十一月二十四日横浜着の予定です。(十月十八日、カトマンズにて、三田宛)

## 中部アンデスへ

### 川上隆

防衛大学校山岳会「アルゼンチン中部アンデス登山隊」は出発準備を完了し先発隊の田尻一美、木村清順、田村真一は十月二十五日室蘭出発、中発の

川上隆、安藤千年は十一月三日横浜出発、田村光昭は十一月二十二日羽田発、隊長朝井一男、大須賀浩は十一月二十九日羽田発でそれぞれアルゼンチンへ向かいます。

登山隊は十二月十五日メンドサからキャラバンを開始、四十四年二月上旬までトスマン川源流付近で六千メートル級の処女峰などの登攀、気象観測、氷河および地形の調査を実施します。帰国は四十四年三月十五日羽田着の予定です。(十月二十日、山崎宛)

## 第十一回もみじ会

### 第二四七回小集会報告

静岡支部担当の現地小集会は十一月九日、十日富士山麓十里本部落で行なわれた。

富士駅で山本静岡支部長等の出迎えを受けた時は、かなりひどい雨であつた。一行は貸切バスで十里山に向かい、四時半近く十里山の愛鷹荘についた。

各自割当てられた二階の室に落着く間もなく、懇親会開催の知らせに階下に行くと、予定のバーベキューもこの雨では庭前では使えず、六十一年前に建てたという旧農家の母屋に続く、既のあとを改装したガレージ内に替えたこと。全員二十九名、まず山本支部長の開会の辞につづいて長老日高名営会員が

「このもみじ会は最初鹿の肉を食ひ初めて十一年目のことは、牛の肉をいただくようですが、しかも会場が既あとはては定めた牛飲馬食の宴となりましょう」

とユーモアにあふれた御挨拶で宴は始まった。四つの鉄板のバーベキューと、大鍋のおでん、お汁粉等、お酒もふんだんに振るまわれた。ここに駄句

あり

「さくら色これでもみんなもみじかい」

席を尺余の棒の大黒柱のある母屋の広間に移し、懇談会となり、山本雄学博士の解説付きで自己紹介が賑やかに始まった。日高名営会員の懐古談は、明治四十四年十五歳の中学生で日本山岳会に入会されたいきさつや、欧州アルプスの思い出など、初めてうかがう興味深いお話がたくさんあった。前日の雨は山では雪となり、富士の五合目以上は純白の厚化粧をして、われわれを迎えてくれた。八時すぎ穂波の美しいすきの中をかきわけて、マイトクエープ中継塔から越前岳に向かう。日高名営会員は若い会員と共に越前岳、黒岳、須山のコースを選ばれて、元気に出かけた。越前岳往復組は、愛鷹荘で中食後、一時半のバスで終始富士を眺めながら岳麓の紅葉を縫って御殿場に出た。

## 参加者

(永原輝雄)

(東京側) 日高信六郎、沼倉寛二郎、松本熊次郎、牧野衛、山崎金次郎、瀬名貞利、佐藤佳子、小野利次、永原輝雄、池田光二、鈴木英一、定公美知代、長坂洋一。

(静岡側) 山本朋三郎、石間信夫、岩永安雄、青島秀雄、川端信治、市野弘、佐野敏郎、竹端節次、長田義則、萩野恭一、水野公男、杉山泰司、菅谷保夫、森村夫、鶴見敏彦、森脇真理。

(以上二十九名)

## 吉沢副会長の報告会

UIA総会に出席された吉沢氏の報告会を十二月二十日午後六時半からルームで開きます。スライドも上映する予定で多数会員の出席をお待ちします。

# 図書紹介

## 遠い山近い山

望月達夫著

「……『遠い山近い山』には、はげしい登攀記や、華々しい遠征記など、おおよそ縁遠い、名前だけでよくこにあるのか、見当もつかないような、山や峠の紀行が多い。しかし著者はそういった俗受けしない、ひとりのすくなく、ひっそりとした山や峠の遍歴が、いかに楽しいかを、かざり気のない文を通じて、戸辺閑話のような気易さで、山仲間と淡々と語っているのである。」

これは藤島敏男氏の序文の一節であるが、本書の性格を言い尽して余すところがない。蛇足になるけれど、私も少しばかり内容を紹介させてもらおうことにしよう。

『遠い山近い山』という気のきいた書名の『遠い山』とは北海道の山のこと、で、『近い山』とは東京から近い山の意味であろう。

『遠い山』は、著者が札幌在勤の三年間に足跡を印した山々の紀行であるが、まず赴任初々一カ月のわづかの間に、もう樽前山、空沼山、札幌岳、芦別岳、後方羊蹄山などへ登ったというから、そのまめのなびにびっくりさせられる。どうしても札幌から手近かの山がいちばん多く歩かれていたのは、要職にある著者として当然であるが、大雪山、日高、知床の山々などまで足はのびている。わづか三年間に、よくもこれだけの山行ができたのだと感心するやら羨望するやらである。それには、どんな余暇もぬかりなく山行に転用するまめさがあったからであらう。

う。たとえば、銀行協会の懇親旅行で阿寒湖へ行って、ほかの支店長たちがマリモ見物をしてる間に、ひとり雄阿寒岳へ登り、山頂で「やや強い風が岩にあたって独得の音をたてている」のに耳をすましたりしたのである。

著者が北海道の山からいろいろな好ましい印象や感慨を受けたことは随所にうかがわれるが、また「雪のながい土地で育ったぼくは、真冬でも雪に全く包まれない低い山を、落葉を踏んで歩く楽しみに永いことなれてきた。……札幌の回りは日帰りで行けるスキーに適した手頃の山が沢山あるのだから、それはそれで楽しみがきつめなところもあるが、冬陽をあびて枯れ草に腰をおろし、弁当を食べたり、焚火をしたり、そんな山歩きはこの土地では十一月はじめてもう駄目になってしまふ。……（北の山）」とか、

「ぼくのどこかにひそんでいた枯草への郷愁が眼をさまして、ふるさとを走った。しかしガラス戸の外に目をやると藻岩の北斜面がいぶし銀に映えている。それより奥の山々の姿は、ぼくの家からは見えないうが、ぼくの頭のなかにはトドマツ、エゾマツ、ダケカンパのたまたまとい共ハッキリ浮んでくるのだ。そして純白の雪の上にスキーをきしらせて足をはこぶ喜びが、ふつと湧いてくるのだった。」（遠い山近い山）

とかいう交錯した気持が著者の心を往来したようである。この枯草の山への郷愁が基盤になっているのが、『近い山』である。西上州、裏秩父、南会津など、俗衆に忘れられたり、気づかれないでいる静かな山や峠の紀行で、これこそおそく著者の心のふるさとを語るものといえるであろう。

であろう。

「ぼくがこのあたりの山や峠に心をひかれ始めたのは、もう二十年以上も昔のことだが、いまでもこの地域がもつ独特のニエンスには、忘れたいものが、多分にあるのを覚える。それは、言ってみれば、昔さかえた峠や往還がすたれ、さびれ行く姿や、都会色の及ばない山村の生活と自然との組み合わせ、更に都会人によごされたことのない自然などによって、おのずから顔し出されるものであり、現代の登山流行地や観光の中心地では、とうの昔に喪失してしまつた、どこかひなびたふん囲気なのだが、そうしたものに、ぼくはひきつけられてきたように思う。」（ブドウ峠）

十石峠、ブドウ峠、金山峠、柳峠、茂来山、父不見山、御荷峰山、赤久縄山、オドケ山、御座石山、四方原山……など、神流川上流を中心に、裏秩父や西上州の山々、数限りない峠から皇への遍歴がつづく。このほかに、海、荒海、七ヶ岳など南会津の登山者疎外の山々、冬の嵐ヶ岳、秋の白峰北岳なども含まれている。

これら選ばれた山々が人間臭くなくばかりでなく、選ばれた季節が晩秋から早春にかけてのものが多いのも特色といえよう。これがこの本にいい知れぬ澄みきった浄らかな自然の姿を直接肌と感じさせてくれる。またそれを語る著者のさりげない文が、いっそう味い深いものに感じさせる。それは、「午後の暖かい日差しを浴びながら、この人のいない山の頂に憩っていると、春が南方から徐々に近づいてくるような気がする」山頂だったたり、「空はぬけるように晴れたって、風もほとんどなかった。霜のおりるのが、はつきり五体に感じられる。明日の朝は定めて霜柱が高いであらう。三人はだまって峠の道をたどる」月夜の峠だったたりする。

著者はいつともよい山仲間と山行を共にしていることを感謝しているが、『近い山』では藤島敏男氏、深田久弥氏、村尾金二氏など、『遠い山』では橋本誠二氏、藤井連平氏など、その人柄のよさもあつて、この本をいっそう楽しいものにしている。また挿入された写真十二葉は著者の撮影であるが、この本にふさわしくいふもので、見て飽きない。たとえば「静かな頂（オドケ山）」など、遠い山が透いてみえる冬枯れの木立の中に、少し傾いた石の祠が斜陽を浴びて落葉の中に立っている、というさりげないものであるが、その味わいは深い。写真のほかに橋本誠二、坂本直行両氏のスケッチもある。しづい装幀もこの本の性格にびつたりである。（今井雄二）

一九六八年三月刊、B6判三百二ページ、定価九百六十円、茗溪堂発行

## 発行

## 関西学生山岳連盟

## 報告第十五号

## 関西学生山岳連盟

復活第九号以来、毎年定期に発行されてきたが、十四年から四年間の空白があり、ようやく十五号が出た。内容は、大学山岳部の展望、記録、加盟校の動き、A.V.K.ルム開設を望むの四編に大別されている。大学山岳部の展望は、リーダーズ・トレーニングの報告（中井健三）大学山岳部の展望（鶴谷将俊）大学山岳部の判断力の把握（中田卓爾）山行形態についての考察（富村勝年）と多角的に現在の大学山岳部の在り方に検討を加えており、現在の関西学生陣の動きがよくうかがえる。記録は京大の「ガネッシニ・六四」

が中心で、アンナブルナ南峰の登頂、ドーラギリ、ガンネッシャ、ガンダキ地区のランタン、ガネッシャ、マナシ三山周辺の紀行が要領よくまとめられている。またそれに続いて北海道の知床、利尻、中央高地の冬、春の報告がある。

加盟校の動きは京都、大阪、神戸、女子の四ブロックに分け、六十四年度から六十七年度の加盟各校の動きを伝えている。

関西の学生群が、何を考え、どのような方向を捕えようとしているか、それぞれの学校により、それぞれの問題を提出しているが、いずれにせよ曲角に立つ学生諸君の前向きな姿がうかがわれるのはまことに頼もしい。全国学生登山連盟の動きもようやく活発化してきた現在、関西学生諸君の動向はまた注目されてしかるべきであらう。（山崎安治）

昭和四十三年七月発行、百一ページ、写真八枚、価額四百円。購読希望者は大阪市北区東茶屋町一〇三シャレ内、同連盟事務所まで申し込みのこと（送料別）

そこに山があるから

アンスワース著  
吉沢一郎訳

まえがきと訳者あとがきを読めばその本の内容がわかる、というものは少ないが、これはその少ないものの一つといえるだろう。

登山の黎明期から第二次世界大戦の勃発にいたるまで、スポーツとしての登山の確立と発展に寄与した三十数人の小伝集である。登場する登山家の選び方は著者の好みにより、概して名前には知られていないが、その功績や背景のくわしいことはほとんど知られていないような登山家を選んだと著者はい



っている。

まず序論、挑戦と変化の章においてアルプスを中心に登山の変遷をひとわたり述べ、続いてアルバート・スミスほか延三十二人の登山家の伝記がつづられている。

登山家の伝記といえはすぐ頭に浮ぶのは、アルバート・レジスターだが、本書は、それ以後の人物が多く登場ししかも、レジスターにおける履歴書のような無味なものでなく、そこに一つの読みものとして肉付けしてあるのが特色といえるだろう。

たとえば、ノーマン・コリーの項ではこんなふうに記載されている「彼の酒好き、煙草好きは相当なもので、ある日難しい登攀の最中、彼の二人の仲間が聞えよがしに、煙草を彼等のバランスにとりかき、煙草を彼等のバランスに話していたそうだった。コリーはこれに一言も答えず、そのかわり残りの登攀でとくにむずかしいピッチをトップで登るときになると、きまってる、見せびらかすようにパイプをとり出し、火をつけ、それをくわえたまま登った、という話だ」

ブルース、ヤング、マロリー、ラウパー、スマイスなどいづれもまた私たちの知られていない面が語られていて興味深い。「ザ・クライマー」誌に連載した原稿に手を加え、一般にもわかりやすく書いたものだといふ。吉沢氏の訳となっているが、実際は、氏の後輩中島寛、倉知敏、佐藤之敏（いずれも会員）の三氏の筆になり、吉沢氏は注だけを引き受けたらうだが訳文もよくこなれている。一つ欲をいわしてももうなら登場人物名に原語を入れてほしい。

(山崎安治)

四十三年八月経済往来社発行、二百八十二ページ、B6版、写真多数、四百八十円。

## 第一回山岳図書

### 交換・即売会

#### 図書委員会

第一回山岳図書交換即売会が十月二十六日(金)午後三時から七時まで本会ルームで行なわれた。初めての試みで、どういうことになるのかフタを開けてみるまでなかなか心配だったが、好評のうちに終えることの出来たのはまことに幸いだった。

図書委員会が主体となって山岳図書交換即売会をやるのではないかとこの話は前からあり、一つ会員の反響をうかがおうではないか、というわけで山三月号に予告を出してみた。ところが予期に対して会員からの反響はさっぱりで、ただ一通細井氏から端書が寄せられただけであった。委員会一同は大いに落胆し、それでは中止だが、やはり乗りかかった舟なので思いなおしてやってみようということになって準備に取りかかった。まず目星しい会員に当りをつけ、趣旨を説明し、出品の依頼状を出した。手もとにある不用の山岳雑誌一冊でもと願ったのだが初めはこれもなく集まりが悪く返事も少なかった。

しかしそのうちルームに出入りされる会員諸氏のあいだにも話題となり、十月二十三日の図書委員会でルームに運んでいただいた本の値ぶみを行なった。最初から売値をつけて出品された方は少なく大部分は図書委員会一任となっていたので、小林義正さんを初め、図書委員の面々は古本屋のオヤジよろしく一冊一冊値段をつけた。ご承知のとおり、現在山岳図書の本書店での値はべらぼうなものである。

そこで頭をひねり、会での適正価格としたのが別項の目録のものである。

十月二十六日当日にも持ち込まれる本などあり、係りは大汗をかいたが、とにかく開催まで漕ぎつけた。話が出てから実に四か月目であった。何しろ珍しい本で、非常に安いものがあるの、単行本は同一品に多数注文のある場合は抽せんとし、本の番号を係りに申し込んでもらい、午後五時締切りで抽せんを行なった。洋書で注目されたのはマンメリーの「マイ・クライムス・アルプス・エント・コーカサス」で、ブラックウェル・ライブラリーの普及版だが、この本はいままでの手に入れたことが出来ない。古書店に出れば五百円以上はするものである。

七人の申し込みがあり、一番最後に申し込んだ稲田房三さんに当たった。和書では「山菜記」に人気が集まり、これも七人の方が申し込めたが、川崎精雄さんに当たった。この本は別に珍しいものではないが、五百円という安さには人気が集まったのだらう。

午後五時、抽せんの結果目星しい本がなくなると、残ったものも続々と机の上から消えて行った。JAC会報のバックナンバーなども先になくなり、はじめ売れないだらうと思っていたが人の新しいバックナンバーまであらたなくなってしまう。

また別にコーナーを設け、現在ルームで委託されている若溪堂の山の本や山岳のバックナンバーなどもよく売れた。こういう本を知っている人が少なかつたからかも知れない。とにかく好評だったのは何よりであった。来年も是非続けたいので、いまからお手と思の本を整理しておいていただきたい。深田久弥、小林義正、橋本幸達、小野幸、藤島敏男、細井隆司、山崎安治、

## 出品目録

松永敏郎、松村寿、神谷恭、松田雄一、富田美知子、斎藤かつら、村上金吾の諸氏にお礼申しあげる。(山崎安治)

### 単行本

富士山(深田久弥・青木書店) 三百円

上越の山(日本登高会編・三省堂) 三百円

山の季節(平田佐太郎編・昭和書房) 六百円

山の素顔(河野不二子・時代社) 二百円

山のわかれ山の出会ひ(田中澄江・講談社) 二百円

奥秩父研究(原金教・朋文堂) 四百円

登山靴とスキー(ヘーク・朋文堂) 四百円

花嫁の越えた峠(串田孫一・朋文堂) 四百円

ガラスの塔(千坂正郎・朋文堂) 四百円

山一随想(大島亮吉・朋文堂) 二百五十円

山からの悲報(山松会) 二百五十円

忘れ得ぬ山(串田孫一編・筑摩書房) 千円

I・III 世界の山々(I)(近藤等編・白水社) 千円

名家の旅(小島島水ほか・如山堂) 千円

不二山(再版)(小島島水・如山堂) 千円

信濃の花(田中實一・荻野朝陽館) 千五百円

みずえ二七五号(小島島水ほか・春鳥会) 三百円

山岳写真大観(小島島水ほか・野球界社) 二百円

世界山岳名著全集十巻ブロード・ピーク(シニムック・あかね書房) 五百円

世界山岳名著全集第十一巻わが半世の山(シブトン・あかね書房) 五百円

マッターホルン北壁(小西政雄・山と溪谷社) 三百円

ヒマラヤ名著全集十巻地図の空白部(シブトン・あかね書房) 六百円

山の気象と遭難(気象庁・朋文堂新社) 三百円

山行(楢恒・岡書店) 千円

登山の文化史(桑原武夫・新潮文庫) 五十円

不二山六版(小島島水・如山堂) 千円

中央アルプスと御岳(平賀文男・大村書店) 五百円

心に山ありて(今井雄二・同信社) 五百円

アルベルグ・スキー術(高橋次郎・博文館) 二百円

山の憶ひ出一巻(四巻)(木暮理太郎・福村書店) 千二百円

K2非情の山(ハウストン・白水社) 五百円

山村小記(向山雅重・山村書院) 三百円

続山村小記(向山雅重・山村書院) 三百円  
ブルーガイド・アルプス縦走(JAC・実業の日本社) 五十円  
登山全書五巻冬山編(JAC・河出書房) 百円  
登山全書六巻春山編(JAC・河出書房) 百円  
登山(JAC・ベールボール社) 百円  
山菜記(片岡博・実業の日本社) 百五十円  
カラー山の花II(山と溪谷社) 二百円  
カラー世界の山々(山と溪谷社) 二百円





- 1 『あしなか』 No. 110
- 2 『OMC』 No. 228
- 3 『奥多摩』 No. 37
- 4 『雲の谷』 No. 1~4
- 5 『京都山岳』 No. 522
- 6 『国立公園』 No. 227
- 7 『山書月報』 No. 69
- 8 『山嶺』 No. 462
- 9 『自然保護』 No. 77
- 10 『SKI 69』 第一集
- 11 『地図』 No. 23
- 12 長崎大学山岳部『山』 Vol. 1 No. 7
- 13 『名古屋山岳月報』 No. 436
- 14 『兵庫山岳』 No. 17~18
- 15 『北海道自然保護協会誌』 No. 9
- 16 『山と雪』 No. 126
- 17 『横浜山岳会会報』 No. 436
- 18 関西学生山岳連盟報告 第15号

### バックナンバーの欠号補充

- 1 『アルプ』 No. 129
- 2 『岳人』 No. 256
- 3 『HIKER』 No. 157
- 4 『山と溪谷』 No. 312

### 山岳同志会贈寄贈

- (1) 『山岳同志会会報』 No. 7, 58, 71  
~78, 75, 80~83
- (2) 『山岳同志会論叢』 No. 1, 3
- (3) 『同志』 No. 10, 11, 13, 15

### 牧野文子氏寄贈

- (1) 『ケルン』 No. 60
- (2) 『山小屋』臨時増刊 No. 47, 50,  
53, 106, 112, 119, 関西版 No. 1
- (3) 『関西山小屋』 No. 71

### バックナンバーと図書寄贈

このたび図書交換会に際し出品の本より、本会図書室に欠号となっている左記のバックナンバーならびに図書の寄贈をうけましたので報告致します。

### 田辺主計氏寄贈

### 日本の報告

図書室では左記の通り合本し、書架になさめました。

- (1) 南極地域観測隊報告書一九五七  
(山二七九号七ページ参照)
- (2) Col. Burrad: A Sketch of the  
Geography and Geology of the  
Himalayan Mountains and Ti-  
bet (Part I・II・III) 1933.
- (3) 日本山岳協会編、海外登山技術研究  
会報告書(昭37~41) 2冊  
Journal Arrived in Sept.  
-Oct. 1968

1. Alpinismus, Jahrgang 6, No.  
7~9, July-Sept. 1968.
2. Der Bergsteiger, Jahrgang 35,  
Heft 8, August 1968.
3. Alpen, Jahrgang 44, 8~9, Au-

### 合本の報告

図書室では左記の通り合本し、書架になさめました。

- (1) 南極地域観測隊報告書一九五七  
(山二七九号七ページ参照)
- (2) Col. Burrad: A Sketch of the  
Geography and Geology of the  
Himalayan Mountains and Ti-  
bet (Part I・II・III) 1933.
- (3) 日本山岳協会編、海外登山技術研究  
会報告書(昭37~41) 2冊  
Journal Arrived in Sept.  
-Oct. 1968

1. Alpinismus, Jahrgang 6, No.  
7~9, July-Sept. 1968.
2. Der Bergsteiger, Jahrgang 35,  
Heft 8, August 1968.
3. Alpen, Jahrgang 44, 8~9, Au-

### (三ページ中)

は急に賑やかになった。式場は山荘前の  
の小さい小広場が当てられ、約五十名の  
参集者が若林委員長、司会の許に行  
事を進めた。

式後は山荘二階の大広間に、「三田会  
長、深田副会長を中心として会員一同  
車座になり、大いに語り、大いに飲  
み、山荘の門出を祝った。

富山山荘の規模 木造瓦葺二階  
建、建坪十二・五坪、延坪二十五  
坪、一階は玄関、会議室(二十人収  
容)、台所、小部屋(押入付四畳)便  
所。二階は集会室(総二階十二・五  
坪)

### 日本山岳会編

1969年版(昭和44年)

A 6 ポケット型(付録—山日記の葉つき) 定価 480 円

# 山日記

- 見るところカラー12ページ/口絵—知床岬・白馬山麓・富士山・エベレスト・食べられる山菜
- 登山案内山小屋一覧/登山行程表/剣岳と谷川岳の登山規制条令/夏山臨時電報電話取扱所一  
覧/地図々幅一覧/日本の山/日本の峠
- 読むページJ・A・Cのこのごろ<三田幸夫> 登山の基礎<渡辺公平> 岩と氷の山登り<原真> 山  
の装備<大塚博美> 山の医学<住吉仙也> 山の天気<山崎安治> 「なだれ」の分類名称<日本雪氷  
学会> 北をさがす<森下博三> 遭難対策<鹿野勝彦> 海外新刊山岳図書<田中栄蔵> 世界の山々  
<吉沢一郎> 山のうた/山菜図によせて<山下一夫>

### 付録—山日記の葉

極点旅行<村山雅美> カラコラムとドクトルマンボー<小谷隆一> 山の絵<深田久称> ネパールの旅より<伊藤  
邦幸> 山を見てある記<丹部節雄> 秩父雑記<清水武甲> 軽装論の根拠<松方三郎> 霧の帽<見学玄> アンデス  
の小村にて<友枝哲泰> 南極大陸の旅行<池戸誠二郎> 結晶と砕片<大貫良夫>

## 茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台2の1 電話東京(03)291-9442/振替口座東京24723

# 会務報告

## 十月常務理事会

(二十八日午後七時本会ルーム)

出席者 三田会長、深田副会長、藤井、大塚、飯野、山崎、丹部、竹田、広谷各常務理事

### 議程

- ①エベレスト登山の件
- ②冬富士講習会の件
- ③冬山シンポジウムの件
- ④年次晩餐会の件
- ⑤その他

## 十一月理事評議員会

(七日午後六時半本会ルーム)

出席者 三田会長、飯野、竹田、宮下、小倉、山崎、大貫、中島、野上、浜野、長尾各理事。沼倉、辰沼、川森、望月、佐藤、津田、石原各評議員

### 議題

①エベレスト登山の件(三田)

大塚理事欠席のため、三田会長から、松方隊長が年内にカトマンズを訪問、登山の見通しをつける、登はん隊長は四十歳代のサミッターを松方隊長に考慮してもらうことなど報告があり、また明年プレモンスーンの遠征はかなり難しいのではないが、資金集めも新しく始めねばならず、登頂だけを目的とした小さな隊にしても早急には進まない。登はん隊長の決定も困難で、エベレスト頂上での暮営といった案も出ているが、目下はスイスに出かけている松方氏の帰国待ちであると三田会長から説明があった。

### ②年次晩餐会の件(飯野)

十二月六日マツヤサロンと正式決定。図書委員会によるこの一本展の準備も進んでおり、ことはルームの委託図書、クラブタイなど販売することにしたので、その係りを小倉理事を中心に婦人部、ルーム委員などこ願する。

ことしの永年会員は次の四氏と決まった。

会員番号六二三 中沢真二氏(一九一七年八月入会・通常会員)

会員番号六二五 田辺多門氏(一九一八年入会・通常会員)

会員番号六二八 岩永信雄氏(一九二八・終身会員)

会員番号六三四 加納一郎氏(一九一八年入会・通常会員)

また名誉会員については、別室で評議員会を開催、松方三郎氏を推すことに決定した。

以上の五氏は十二月六日の年次晩餐会の席で正式発表する。

報告事項

### ①登山講演会の件(宮下)

十二月九日午後一時から池袋西武フアウンテンホールで一部と二部に分けてやる。三田会長の講演題名が「山登りと私とその仲間」、また二部では大塚理事が出席出来なくなったので明大OB藤田佳宏氏に「遭難を中心として」、金坂一郎氏の話も「山登りについで」の判断力の一例」と変更した。毎日新聞社とスポーツニッポン新聞社の後援となった。

### ②冬富士講習会の件(山崎)

十一月二十二日から二十四日まで予定通り行なう。

### ③山岳の広告と進行状況(竹田)

(中島)

広告はまだ四分の一より集めていないが、前年度くらいはこれから集める。山岳の原稿は松本善二氏のもの

最後に全部予定のものがそろった。年度中にしたい。

### ④会員名簿の件(飯野)

丹部理事が主としてやっており、現在三校をやっている。晩餐会までに間にあわせたい。

### ⑤女子職員採用の件(飯野)

図書室の職員大越さんが辞めたのでその後任として東満子さんを採用することにした。

### ⑥図書交換即売会の件(野上)

十二月二十六日に行ったが盛会であった。恒例の行事としたい。

### ⑦編集出版委員会の報告(山崎)

横さんの本を出すべく目下研究中であり、近く結論を出したい。

### ⑧六甲山オリエンタルホテルの件

(津田)

## ルーム日誌(43・10)

3日(木) 定例理事評議員会  
4日(金) 会報編集委員会

8日(火) 図書委員会、明大炉辺会  
16日(水) 小集会(第二四六回) 南極越冬隊長島島鉄也氏講演  
23日(水) 図書委員会、海外連絡委員会

### 会

26日(土) 図書交換会

28日(月) 常務理事会

29日(火) 稲田山岳会総会

30日(水) 北大山岳部OB会

31日(木) 登山講習会打合せ会

十月中来室者四一〇名

本会救難者(十一月三日)

増田甲子七(会員番号四四五三)七十歳。勲一等旭日大授章

辻村太郎(会員番号二二一)七十八歳。勲三等瑞宝章

図書交換即売会会計報告

売上 三三、七三〇円

内ルーム基金(五%) 一、六三七円

なお、左記二名の方が売上金をルーム基金に寄付されました。

### 記

松田雄一氏 七六〇円

齋藤かつら氏 九五円

ルーム基金入金報告

九月一日〜十月三十一日間のルーム基金応募者は左記の通りです。

申込件数 七件

申込口数 七件

(追加一件を含む)

申込口数 四三・六五口

総申込件数 一三七六件

総申込口数 七五〇五口

| 氏名     | 会員番号 | 応募口数 | 居住地  |
|--------|------|------|------|
| 荒木正弘   | 五〇三五 | 一    | 神奈川県 |
| 大阪市立大学 | 五二七  | 一    | 大阪   |
| 金沢守    | 三六二七 | 二    | 千葉   |
| 岸      | 六五〇六 | 一    | 東京   |
| 山内高    | 明五七三 | 三    | 東京   |

本会関係その他

日本山岳会越後支部 追〇・三

計 二三・四  
マナスル写真剰余金 二六・三五  
(募金目標に対し九三・八%)

## 消息

吉沢一郎副会長帰国 UIAA総会  
に出席された吉沢副会長はアメリカを  
まわり、各地の岳人と交歓されたのち  
十一月八日夜無事帰国された。  
図書室職員に東さん 大越嬢が健康  
上の都合で去る九月辞任された図書室  
職員の後任として東満子さんが十一月  
一日から勤務されることになった。

## 学生部海外遠征報告会

学生部では昨年六月に引き続き海外  
遠征報告会を十月十六、十七両日上智  
大学で開催した。学生部会員がそれぞ  
れ持つ海外登山への興味及び情報収集  
に役立つよう企画されたが時間に制限  
があり質疑応答の時間が十分にとれな  
かったのが残念であった。第一日参会  
者七十名。第二日三十二名。

## 報告者

- 第一日  
①中央大学バンダコール(磯部)  
②立正大学イブラル谷(望月隊長、後  
藤)  
③青山学院大学アラスカ(栗林隊長)  
④世界の山を登る(明大OB植村氏)  
第二日  
①上智大学バンジャブ(神田)  
②法政大学ブニ・ソム(山内)  
③学習院大学ヒンズー・ラジ(時田)  
④日本大学グリーンランド横断  
(OB嵯峨野氏)  
⑤学生の海外遠征について  
(明大OB藤井氏)  
(梶記)

## ◇クラブ・タイのこと◇

今度「国際山岳連盟」のロンドン総

会に出ていろいろ驚いたり感心し  
たりしたことが多いが、トルコ山岳会  
の会長シキルさんが、JACのクラブ・  
タイをしていたのにはびっくりした。  
聞いたら京都の婦人西アジア隊がアン  
カラでくれたのだと言っていた。

私もJACのネクタイをお土産に持  
って行ったが何処でも喜ばれたことは  
言うまでもない。ACやAACにもク  
ラブ・タイはあるが、JACのがどれ  
に比べても品質、図柄とも一段と優  
っていて、正式の会合の時にはどこでも  
皆、自分の山岳会のをはずしてJAC  
のを付けてきてくれた。

これは必ずしも私に敬意を払って  
のことだけではないと思う。この意味  
でこれの制作に直接携わった川森さん  
その他の方に御礼を述べるとともに、  
今後海外へ行かれて向うの登山家に会  
う機会のある人は、是非これをお土産  
に持っていかれるといいと思う。もて  
ること疑いなしである。(吉沢一郎)

## 昭和四十三年度

## 「山」編集委員

編集代表 山崎安治  
委員 吉沢一郎  
坂本矩祥  
松田雄一  
倉知敬  
小方全弘  
担当理事

昭和四十三年十二月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三一二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

頒価五十円 (283) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂